

## 「妙見信仰と八代」展の概要と見どころ

八代を代表する名所のひとつに八代神社がある。江戸時代は妙見宮と称し、今なお我々が親しみを込めて「妙見さん」と呼ぶこの神社の秋季祭礼「八代妙見祭」は、400年以上の伝統を持つ八代の宝物だ。しかし、なぜ八代で妙見信仰が発展してきたのか。実はナゾが多い。この根本的な問いに挑むのが今回の特別展だ。初公開14点を含む59の作品でお届けする。出品リストは当館HPで公開中なのでご参照されたい。

そもそも妙見とは、唯一不動の星・北極星に対する信仰をルーツとした仏教的概念だ。根本経典『七仏八菩薩所説大陀羅尼神呪經』によれば、妙見は万能最強の菩薩。国土の災厄邪悪を払い、衆生に吉祥長生をもたらすと説く。日本では8世紀から畿内で妙見が尊崇されはじめ、やがて現世利益をもたらす菩薩信仰として各地に広がった。

人々は何を妙見に求めたのか。興味深いのは、『日本霊異記』や『入唐求法巡礼記』などの古代文献において、当初から「海を鎮める」霊験が強調されていることだ。正確な地図も電灯もない時代、海に生きる人々が、北の夜空に輝き正確な方位を導く北極星を頼りとしたのはごく自然なこと。彼らがその神格化である妙見を尊崇したことは想像に難くない。

これをふまえて八代の歴史を見直すと、やはり「海と妙見」との密接な関係がうかがえる。17世紀後半、商売のため船で長崎に向かった八代町人井櫻屋勘七は海上で嵐に遭う。そこで勘七が妙見に祈ったところ難を逃れ、その際に獅子楽の技を伝授されたという。このエピソードは、海と港湾を生活基盤とする八代城下町の町人たちの妙見への尊崇ぶりを象徴している。こうした町人たちの篤い信仰が城下町祭礼「妙見祭」発展の原動力となったのだ。

また、八代城主松井興長は、海辺に拓いた松崎新地の鎮守として妙見を勧請し、万治元年(1658)松崎妙見宮(現松崎神社)を創建している。海の町八代に暮らす者は、統治者も町人たちも皆、妙見に「海を鎮める」霊験を求めたのだ。

江戸時代の八代妙見宮には、人々の寄進奉納によって多くの建物や仏神像が存在していた。そこには社殿のみならず神宮寺や本地堂、文殊堂などの仏教施設もあり、まさにそれは神仏習合空間。また、妙見は万能ゆえに種々の神仏に変化するとされ、それを体現するごとく、妙見菩薩に加え、阿弥陀如来、十一面観音、弁才天など様々な仏像が祀られていた。

そんな八代の妙見も順風満帆だったわけではない。明治3年(1870)政府の神仏分離政策により、元々が仏教的である妙見は排除されてしまう。神宮寺などの仏教施設はもちろん、そこで祀られていた仏像なども排除され、社名の「妙見」という文字すら失われた。

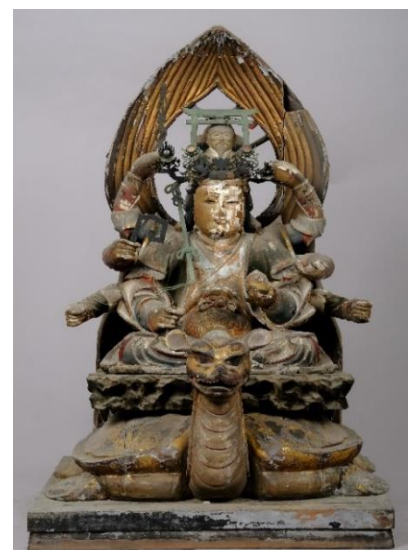
しかし、その遺品たちは、人々の変わらぬ妙見への尊崇の念により、現在まで守り伝えられている。「妙見祭」と同様、これも妙見をめぐる長く深い八代の歴史の真骨頂だ。

今回ご紹介する作品の大半は、かつて同じ八代妙見宮にいた「元同僚たち」。約150年ぶりの同窓会状態の当館は今まさに「妙見だらけ」。このレアな瞬間をお見逃しなく。

【学芸員(主幹) 鳥津亮二】



八代妙見宮一乗坊伝来の「鹿乱妙見尊像」  
江戸時代(18世紀) 当館蔵  
出品番号 24



亀蛇に乗る「木造弁才天坐像」  
江戸時代(18世紀) 金立院蔵  
出品番号 35